

1. 講道館柔道の海外普及に関する史的研究；富田常次郎の米国行

講道館 村田 直樹

キーワード；富田（旧姓山田）常次郎，柔道の海外普及

1. A historical study of the diffusion of Kodokan Judo in the US by Tsunejiro Tomita (formerly Tsunejiro Yamada)

Naoki MURATA (Kodokan Judo Institute)

Key words ; Tsunejiro Tomita (formerly Tsunejiro Yamada), Diffusion of Kodokan Judo overseas

Abstract

1. The second Kodokan Judo Institute instructor dispatched overseas was Tsunejiro Tomita, accompanied by Mitsuyo Maeda.
2. At first Tomita had difficulty in dealing with students who had learned wrestling, but eventually he developed a winning strategy to cope with wrestlers.
3. Regarding judo instruction in the U.S.A, we could say that to a certain degree, Tomita was able to adopt instruction to American norms aided by his high level of understanding of international culture because of his learning English at the Kobunkan, Kano shihan's English language school, and his becoming an English instructor.
4. Examining the international diffusion of judo, facing a wide variety of often difficult circumstances, we believe we can discern that Tomita was motivated by a great patriotic spirit.

和訳

1. 講道館の海外派遣第2号は富田常次郎であり、前田光世（旧名栄世）も随伴していた。
2. 富田はレスリングを学んだ学生との手合わせで難儀したが、のちには勝利の戦略を習得して成功した。

3. 柔道の米国に於ける指導について、或る程度迄は米国民の風俗習慣に合致するようにすることが、その国の流儀にかなうという見識は、弘文館で英語を学び、英語教師にもなった富田の国際理解の水準の高さを物語っているものと言えよう。
4. 柔道が国際的普及をしつつある時期に臨んで、世界の舞台を前に引っ込んでいることは大変残念である故、種々の事情を斥け、成敗は一に天に任せて海外進出を断然決心し、背水の陣で臨むとする富田の態度に國士の気概が看て取れよう。

I. はじめに

歴史学の作業の一つに学の対象にしようとする過去の事象（テーマ）の再構築、乃至再現があるが、再構築や再現したものの提示だけでは、さほどの意味を持つとは考えにくい。何故ならば、提示されたそれは過去の内容であり、過去の時点に於いて当時の人々の間に意味を持ったものであり、それ以上それ以下のものではないと考えるからである。そこに留（とど）まる再構築、再現であるならば、それらは資料館、博物館等の展示史料として羅列されるものと同義であるということになろう。

では過去の事象の再構築や再現の作業に学問的意味を持たせるとは、一体どうすることであろうか。一つは、その作業から一步進めて、現代に連関し得る意義を見出すことであろう。

しかし、そうは言っても、歴史学の深刻な問題はまだ横たわったままである。どういうことか。一般に過ぎし歴史的事象について実際に目撃、観察した人は、現時点では殆どいない。五官による観察者がいない以上、たとえ信頼出来る史料があると雖も、歴史学の議論（ディシプリン）とは、限られた史料（殆どの場合文書）上の内容であることを免れない。事実を構成するありとあらゆる環境状況の豊かさを思えば、史料に拠る論議はまさに管から見た事象、管見以上の何ものでもない。かような立ち位置をきちんと認識し、その認識からぶれることなく、信頼に足る史料を基に対象を再構築し、そこから現代的意義を見出すところに歴史学という作業の意味があると言えよう。

拙論は、山下義韶に次いで米国へ派遣された富田常次郎に焦点を当て、富田の普及活動の過程に於ける一事象を再現し、現代に通じる意義を見出して柔道の海外普及史の一資料を得ようとするものである。

II. 格闘技普及の宿命

柔道は嘉納治五郎を創始者とし、諸方面からの人智を経てその体系化へ進み、遂に人の道として世に問われるものとなった。この意味に於いて、柔道は一つの文化になったと言えよう。文化であるが、自然の原生林を文化と言わない訳は、およそ人智を経ていない現象だからである。原生林の存在は、自然の摂理とでも呼ぶべきもののなせる現象と言っておこう。

では野球はどうか。野球は海外から我が国へ移植された文化である。その移植作業を概観してみると、この文化を受容する側である日本は、先ず何よりも野球先進国から野球技術を教授され、学習しなければならなかった。

これは教師と生徒の関係と言える。生徒は、勿論、技術を知らない初級者である。教える側は初級者を相手に教授する訳であるから、言わば玄人が素人を教えるのも同然であろう。この限りに於いて、技能的優位者は初級者を手玉に取れる。その点は容易な作業の部分であろう。球技等のスポーツの移植にはそういうところがある。

格闘の技術である柔道ではどうか。全く異なると言わねばなるまい。柔道の海外進出、乃至移植作業が、球技等のスポーツの場合と決定的に異なるのは、最初に一对一の対人的格闘勝負の‘洗礼’がある点である。教授や指導よりも前に、行く先々の土地に待つ猛者と一対一で真剣勝負し、これに勝利しなければならない。ここに於ける勝利こそ、海外進出作業の第一歩なのである。格闘技の普及ではこの道を避けて通れない。これは格闘技が新天地へ進出する際の宿命と言える。明治37年（1904）11月9日、山下義韶に次いで新大陸へ講道館から公式に派遣されたのは、富田常次郎であった。富田には厳しい宿命が待っていた。

Ⅲ. 講道館最初の門人

富田常次郎は講道館最初の入門者であり、草創期の永昌寺時代から柔道の普及発展の為、創始者を助け、労苦を共にした。講道館四天王の一人として、明治20年（1887）前後と言われる柔術との対決時代にも活躍し、講道館柔道の名声を挙げた功労少なからぬ人である。

その富田が山下に次いで渡米する。講道館明治期の発行雑誌を紐解いて見ると、不思議なことを感じさせられる。それは富田の渡米に関してだが、先の山下と比べてみると雑誌巻頭に富田の肖像写真を入れ、頁も割いて大々的に記事として扱っている点である。山下渡米に際するこういう記事の扱いは見られない。この差は何かと興味を引かれるが、残念ながら現時点では不明である。推測すれば、富田は入門第1号であること、嘉納塾の舎長であること等の理由から、山下よりも扱われ方が重かったのだろうかと言うことである。顧みれば、山下の場合は、サミュエル・ヒル氏への紹介が慶應義塾の教え子柴田一能、小柴三郎等で行われた。山下の渡航史に関しては、文献上、彼等の名前が必ず登場し、何故か嘉納の名前は陰である。しかし、富田の場合、例えば「嘉納塾同窓会雑誌」で口絵と送辞、並びに告別の辞と項目が立てられ、形式が踏まれている¹。今日のような航空路の旅が一般的でなかった時代、太平洋の波頭を越える旅には、相当の覚悟が要った筈である。身を挺して為す行動の前提に在ったもの、それは富田の告辞（後述）によれば、武士的伝統に寄り添う気概、気迫、魂等々と呼ばれるものであったに違いない。

Ⅳ. 富田舎長を送る

舎長とは嘉納塾舎の長という意味であり、嘉納塾とは明治15年（1882）1月に創められた嘉納治五郎の私塾である。年齢別に分かれ、幼年舎、中年舎、成年舎の三舎から成っていた。この塾から、時代を担う幾多の学者、政治家、外交官、実業家、軍人等が輩出²した。

幼年舎は満6年以上満14年以下の子弟を入れ、中年舎は満14年以上満20年以下の子弟を入れ、成年舎は満20年以上の子弟を入る所とす。但し教育上の都合により、この制限に依らざることあるべし。各舎に舎長を置き、塾長の旨を受け、舎内子弟の薫陶に任せしむ³

富田常次郎は幼年舎中年舎双方を管理する長であった。ここに塾生一同として、その富田の渡米に際して綴った送辞がある。赤誠の遺憾無く吐露され、格調の高さを感じさせる文章に、当時の塾生、学徒の水準の高さが窺い知れる。尚、下記の資料文中（ ）及びカッコ内の説明文、即ち読み方や意味は筆者による。

富田舎長、將に渡米の途に就かれんとす、哀別の情に堪えざるなり。舎長は我が嘉納塾中幼

年舎長として、尾田舎長の後をうけ、爾来ここに1年有半、その間頗る繁劇の身を以て、或いは訓話に、或いは示教に、親しく吾等を導き給ひしこと枚挙に遑（いとま）あらず。翻って我が塾史を閲（けみ。あらため見る）するに、舎長就任の時やまさに至難の局面に際し、経営頗る惨憺たるものありしを覚ゆ。しかも能くこの難局に処し、停滞を通じ、進歩の途に就かしめ、遂に今日あらしむるに与って力ありしもの、実に吾等の今別れむとする舎長に於いて是を見る。更に記録に徴し、また先輩につきて聞くに、舎長は吾等塾生の先輩の先輩にして、厳として廿余年の歴史輝ける我塾の紀元と始とを同じうし、爾来是と共に発達し来たりし我が講道館の幹事として、恩師の股肱（ここう。ももとひじ。主君の手足となって働く最も頼みになる家来）となり、陰に陽に尽瘁（じんすい。心を尽くして、ほねおる）せられし事多年、今や元老として講道館の重鎮たり、依之觀之（これによりてこれをみるに）、吾等は実に尊敬すべく、再び得がたきの先輩たる舎長の下に訓育を忝（かたじけの）うし来れるなり。而して希（こいねがわ）くは風雪に撓（たわ）み易き少年の時を、この幸福なる恩翼の下に育まれ、やがては天翔（かけ）らむ大鵬の雛たらむを期したりき。思いきや、願い今にして空に帰せむとは、恋々としてひとり別離の惜しまるゝ哉。

さはれ舎長の去らるゝ、上下三千載磅はく（ほうはく。混ぜ合わせて一つにする）として神州にこもりては美を繚乱（りょうらん。もつれ乱れるさま）の桜と競ひし古武士の神髓を世界舞台の上に発揚せられむが為なるを聞き、顧みて皇軍満州野に武威赫々たるの時、同情夏雨の如き彼の北米の新天地に虎嘯（こしょう。英雄が志を得て活躍するさま）せられんとし、その前途洋々として春潮の漲（みなぎ）るが如きを見ては、転がった肉躍り、氣昂じ、万歳三唱禁ぜむ能わざるなり。船この客を乗せて万里の波濤を行（めぐ）るのとき、汝太平洋の波静かに楽を奏して無聊（ぶりょう。たいくつ）を慰めよや、時、秋風まさに身にしむ、聞く、北米の東濱氣候、我よりも寒しと。希（こいねがわ）くは邦家の為に加餐（かさん。栄養を摂って体を大切にすること）せられよ 頓首 明治三十七年十一月一日 嘉納塾生一同⁴

富田がこれに応える。富田の告別の辞は、諸方面への気配りが行き届き、道を修行して来た人間像の一モデルと言わしめるものがある。

概要を先取りすれば、冒頭に渡米の目的を述べ、それも高い評価を受けた我が柔道の普及であると矜持を隠さず、数年前より顕著になって来た外国特に西洋諸国に於ける斯道の普及発展も、実は嘉納師範の既に予言していた処と、師範に対する畏敬の念を表明し、遂には講道館柔道は我が国の文明の一部、即ち教育という文明を代表している優れたもの故、諸国の習慣風俗に適合する方法を以て指導普及するのは、柔道の為、世界同胞の為、我等先達の義務である、と信念を表明している。又自身は年老いる迄斯道一筋に精進するもなお未熟である、と馬齢を重ねる謙遜をした上で、しかし今から国際的舞台で活躍するぞ、人事を尽くして後は天に任せるぞと宣言する。加えて同行の前田光世と自分の段位とを併せると丁度10段になるから、人を教える師範の資格無しではあるまい、と述べた諧謔は富田一流の冗句であろう。嘉納は10段に達したら師範と呼ぶことを許可⁵した。

後段に至り、舎長を辞するの挨拶、後任人事に対する感謝、又現地からの音信を忘れない、そして日程変更の詫び等々、遺漏無き文章に纏めている。

文は人なり^{註1}と言う。富田は諸方面に対して細心の気を配っている。気を配っている分、内容が多くなる。複文が多く、読みにくい。多少こまか過ぎるくらい無しとしないが、文は人なり

だから、これは富田の性格のなせる業として仕方のないことだろう。

それよりも、飛行機の発達していない時代、太平洋横断航路の旅には、それなりの覚悟の要ることであつたろう。未だ見ぬ米国に日本発祥の柔道を伝える旅である。出立に際する緊張感は、察するに余りあると言わねばなるまい。柔道普及の旅程に立つ富田は如何に語ったか。以下、富田の手になる史料を紹介し、その内容の分析に入ってみよう。

V. 告別の辞⁶

以下、富田の文章－。

我が親愛なる嘉納塾同窓生諸君、殊に久しくご面会せざる在地方会員諸君、我輩はこの度米国に参ることに決定致しまして、来る11月16日を以って東京を出発する予定で御座います。

渡米の目的は茲に申し上げる迄もなく、諸君のご賢察の通り、講道館柔道を外国に伝道の為で御座います。ご承知の通り、数年前より我が講道館柔道の評判は、西洋諸国に於いて年々高まりつつありましたが、この度の戦捷（せんしょう。勝利。日露戦争のこと）の発展は、日本の特殊の教育として更に一層その声を大ならしめたようであります。同窓山下君の書状によると、米国では大統領始め多くの紳士が熱心に修行して居られるのみならず、ハーヴァード大学でも先月から開始するようになったということであります。

もとより斯かる気運の早晚必ず到来せるならんことは、すでに10数年前富士見町時代に於ける頃より、我が講道館師範はしばしば予言せられましたことで御座いますが、しかしながら、かくのごとく速やかに事実となりて顕れんことは、恐らく預言者なる師範閣下に於いても待ち設けざりしことと存じます。

回顧すれば、講道館創立以来、僅かに23年間にして、その教えは斯くの如く遠く世界に及ぼさんとし、亦その門下には軍の神^{註2}まで出すに至りしことは、実に20余年来、先生の火の如き熱誠が茲に時世に触れて、その光を発揮したのでありまして、実は当然のことではあります。しかし、先生のご存世中、先生の前途は寧ろ今日以後により多くの余地を存ずるの時に於いて、其の之を見るに至りしは、実に我々門生の先生の為に祝さざるを得ざる次第で御座います。

柔道の世界的普及については既に嘉納が予言していた通りであり、その状況をもたらしたものは、嘉納の熱誠の發揮であり、それは当然のことだと師を称賛している。

それ斯くの如く今日の講道館柔道なるものは、実に日本の文明の一部を代表している、少なくとも教育の大切な一部を代表しているのであります。日本ではそう思わない人が在つても、外国の識者は確かにそう思っている、なかんずく、米国は非常に歓迎しているようであります。故になるべく良きかたちに於いて、亦或る程度迄は彼らの習慣風俗に合致するよう之を指導することは、この道の為であると同時に、世界の同胞に対する斯道先輩者の義務であろうと信ずるのであります。

しかしながら、ご承知の通り、吾輩は最早塾でも講道館でも年寄りの仲間に数えらるゝ一人でもあり、且つは未熟の者でありますから、到底其の任ではありませんが、しかしながら、吾輩は今日迄10数年来、自分の専門としては斯の道を通して来たのでありますから、しかも

これ迄親切なる知己の転業説も容れずして通して来たのでありますから、今この面白き時期に逢遭して世界的舞台に向かって引き込んで居ることは、私情に於いても如何にも残念に思います。

依ってこの度は、種々事情を斥け、成敗は一に天に任せて、ここに断然決心致しまして、先ず米国に1年半、欧羅巴に1年半、都合3年間を標準として背水の陣に臨む考えであります。

米国派遣に臨む富田の視点が垣間見られるので、ここに分析し、整理してみよう。

1. 講道館柔道は日本の文明の一部を代表し、少なくとも教育の大切な一部を代表していること
2. 外国の識者は上記1のように思っていること、特に米国は非常に歓迎しているようであること
3. 故にもなるべく良きかたちに於いて、亦或る程度迄は彼らの習慣風俗に合致するよう之を指導することは、この道の為であること
4. そのような方法で取り組むことが世界の同胞に対する斯道先輩者の義務であろうと信ずること
5. 来し方、転業もしないで一意専心柔道を専門として来た故に、今ここに於いて師範の予言通り我が柔道が国際的普及をしつつある慶賀すべき面白い時期に臨んで、世界の舞台を前にして引っ込んで居ることは大変残念であること
6. 依って種々の事情を斥け、成敗は一に天に任せて、ここに断然決心した。先ず米国に1年半、欧羅巴に1年半、都合3年間を標準として背水の陣で臨む等

明治37年（1904）末の話である。富田の覚悟の程が窺い知れて面白い。見るべき点が上記3に在る。3は、「なるべく良きかたちに於いて、亦或る程度迄は彼らの習慣風俗に合致するよう之を指導することが柔道の為である」という視点である。ここに異文化交流に於ける現在にも通じる要諦が潜むと思われるので詳述してみたい。

先ず、「良きかたちに於いて」の意味は何だろうか。これは、講道館柔道の本質を損ねることのないように、という意味に捉えられよう。

次に、「或る程度迄は彼らの習慣風俗に合致するよう之を指導することが柔道の為である」という視点は、何を意味するのであろうか。これは日本人の間には日本人のしきたりや固有の行動の仕方があるように、米国人の間には米国人のしきたりや固有の行動の仕方がある筈なので、その内容に注意し、或る程度迄は米国流に合致するよう指導すれば、米国人としても日本の流儀（この場合は柔道の練習に関わる日本的やり方）に対して、さほど抵抗感を生じることなく受け容れるであろうし、それが柔道普及、即ち柔道の為であろうという視点である。ここには日本発祥の柔道なのだから、日本人がやっているようにしなければならない、という単線的考え方は一步引いて置かれている。

富田の史料に触れて、ここに筆者自身の欧州に於ける実際の指導体験から思い起こされることを述べてみたい。直ぐに想起される忘れ難い内容は、道場という概念、道場の入退出時の礼、指導者に対する礼等々を外国の練習者に知らしめることの容易でなかったことである。

何ゆえ容易でなかったのか。それは詰まる処、人間の在り方についての見解の相違と言ってよ

いものが横たわっていたからである。筆者が派遣された国では、成人クラスの場合、教える側と習う側の人間の在り方が、ほぼ対等、乃至それに近い状況であった（ヨコの関係）。筆者が在住していた2年間、少なくとも筆者にはそう見えた。

又筆者は、その国の国立大学の語学課程に籍を置き、授業を受けていたが、語学の教授が、我々受講生の語学力が多少向上して来た頃を見計らって次の様に言った－これからは、質問等で私を呼ぶ際、〇〇教授、ではなくて〇〇と呼ぶように－。〇〇は彼のファーストネームである。受講生が教授をファーストネームで呼ぶのである。教授が我々を呼ぶ際も同様にファーストネームで呼んだ。これらは一体何を意味していたのだろうか。

それは、それがその国のしきたりだということを意味するものであった。教師の意図として、言語を学ばせると同時に、その国のしきたり、固有の行動の仕方を学ばせようとしたのである。しきたりや行動の仕方を学ばせることによって、その国の言葉を習う受講生が、その国に於けるそれぞれ生活する場面にふさわしい言語行動の取れるよう期待したのである。かくして筆者には、そこにヨコの人間関係という人間の在り方を目で見、肌で感じたのであった。

翻って我が国の場合はどうか。師弟という人間関係はタテである。ヨコは無いと言っても過言ではあるまい。その反映のひとつが我が国の尊敬、謙譲を原理とした礼法であると言えよう。それは家族に於ける人間関係に始まり、学校、会社等、一般社会に於ける人間関係の在り方についても言えるものと思われる。

師弟の礼を取るということの意味は、教える側に対する教わる側の敬意を以って接する態度を指す。これはまた教えを授かる場所、教場、またそれらの周辺をも含めて発せられる態度である。「礼に始まり礼に終わる」という人口に膾炙する言葉も、このタテの原理から来る礼法を指すと云ってよい。そしてこの内容を持った礼をこそ重視し、決して欠いてはいけない文化、それが我が国の武道の世界であると言って良い。三尺下がって師の影を踏まず^{註3}という謂いもある。

富田は明治の日本人である。ついこの間まで、武家政権を支える封建道德の社会であった。今日の日本人よりもタテの礼儀作法の意識は、よほど強かったであろうことは想像に難くない。

しかし、その富田は講道館四天王と呼ばれた猛者であったにも拘わらず、「或る程度迄は彼らの習慣風俗に合致するよう之を指導することが柔道の為である」という視点の持ち主であった。その視点は、普通の柔道猛者のイメージからすれば、違和感を抱かせられる識見と柔軟性を感じさせるものではあるまいか。もしそうであるなら、かような視点を何故持ち得たのであろうかという関心が湧いて来る。

何故か。直ぐに考えられる処は、1. 洋行を済ませた嘉納の薫陶を受けていたこと 2. 英語教師になる過程で西欧の文物に多く接していたこと等が要因ではないかということである。但し、英語教師なら誰もがそうかと言えば、そんなことはあるまい。富田の特性、個人的資質が機能していたであろうこともまた想像に難くない。

ここで富田の履歴を見てみる必要が生じる。以下は講道館柔道資料館に拠る。

七段 富田常次郎 TOMITA Tsunejirō (1865-1937)

慶応元年2月静岡県君沢郡に生まれる。明治12年嘉納師範の巖父希芝（まれしば）の知遇を得、伴われて上京し、その邸に住む。同15年講道館創立と同時に最初の門弟（6月5日）となり柔道修行に入る。同16年8月西郷四郎とともに講道館最初の初段となり、次いで同年11月そろって最初の二段に、さらに西郷が18年8月三段を跳んで最初の四段になったのに続いて同年

9月同じく三段を跳んで2人目の四段に、同21年2月ただ1人最初の五段に列せられた。同24年4月、明治天皇が新築成れる学習院に行幸されたとき、柔道教師として生徒の柔道を天覧に供する光栄に浴した。同39年前田光世、佐竹信四郎らと米国に渡り、柔道の普及につとめ、帰国後は本館及び溜池に設けた東京体育クラブを根拠として柔道の普及振興に尽した。昭和2年11月4日七段、同12年1月13日病没。富田七段が講道館草創時代から嘉納師範と起居をともにして柔道の研究、発展に尽された功績は頗る顕著なものがある。

資料館殿堂に掲げられた富田の履歴を見る限りでは、その内容が柔道修行の面のみに終始し、富田の異文化に対する視点の如何に言及した個所は見当たらない。

富田の活動に関するもう一つの史料、講道館柔道側面史⁷を紐解いてみると、そこには富田の修めた学問が英語であり、英語教師として身を立てていたことが紹介されている。以下、「側面史」の史料によって、英語教師としての富田を抑えておこう。

VI. 英語教師としての富田

富田常次郎は、伊豆國君沢郡久連村38番地戸主平民農山田半助三男として慶応元年2月25日生。故に旧姓を山田と言った。明治26（1893）年富田家の婿養子に迎えられ、富田と改正した。

明治15（1882）年東京大学を卒業し、学習院の教師に迎えられた嘉納治五郎は、1月に嘉納塾を起し、3月に英語学校である弘文館を創設した。

富田は（この頃は山田）嘉納塾々生となり、弘文館にも入学。英語の専門教育を授けられた。後日、伊豆学校や学習院の教師になる為の教育はここで習得されたものと言えよう。

明治29（1896）年9月、富田は英語教師として伊豆学校へ赴任した。伊豆学校とは旧制静岡県立韮山中学校の前身であり、韮山中学は後に静岡県立韮山高校になり、現在に至っている。富田が伊豆学校へ赴任する背景については諸説あり、拙論はそれとは主題が違うので、そちらの分析解明には分け入って行かない。

富田の赴任時、校長は江川英武であった。江川の教育の中心は英学にあった。江川の実父は、かの江川担庵^{註4}である。江川担庵の実子が校長となり、アメリカ仕込みの英学を教えるという評判は高く、旧代官支配地から多くの生徒を集めた。伊豆学校の英学は、教科全般の教材が英文であったので、その水準は読解力に於いて高かったものと思われる。

富田は、「韮山時代は英語教師として多少書物も読んだ」と述べている。伊豆学校の教科書目表（録）」を次に掲載しておく。

ナチュラ ルヒロソ ヒ	全一冊	千八百七一年	クレイ氏著	英国出版
ヒレツク	全一冊	千八百七十年	スワード氏著	英国出版
政治学ノ部				
米國政体論	全一冊	千八百九十年	ヤング氏著	英国出版
レフセニ テニナ	全一冊	千八百九十年	ミル氏著	英国出版
レフセニ テニナ	全一冊	千八百九十年	スヘンカー氏著	東京大学印行
ガハ ノント	全一冊	千八百九十年	ハナラウト氏著	英国出版
イン グリス	全一冊	千八百九十年	マユリー氏著	東京大学印行
イン グリス	全一冊	千八百九十年	ウルセー氏著	英国出版
リ バー	全一冊	千八百九十年	ミル氏著	英国出版
化学ノ部				
イン グリス	全一冊	千八百九十年	ロスコフ氏著	英国出版
ケ ミスト	全一冊	千八百九十年	ミル氏著	英国出版
法学ノ部				
法律原論	全一冊	千八百九十年	テリイ氏著	東京大学印行
セ ラリ ラフ	全一冊	千八百九十年	ベンサム氏著	英国出版
レ ビ ス ト ン	全一冊	千八百九十年	ホイットン氏著	英国出版
論理学ノ部				
ロ ジック	全一冊	千八百九十年	セホレス氏著	英国出版
ロ ジック	全一冊	千八百九十年	ミル氏著	英国出版

哲学ノ部				
ホ リ カ ル	全一冊	千八百九十年	スヘンカー氏著	英国出版
イ ン グ リ ス	全一冊	千八百九十年	スヘンカー氏著	英国出版
ス タ ー テ リ イ	全一冊	千八百九十年	スヘンカー氏著	英国出版
フ ア ー ス ト	全一冊	千八百九十年	スヘンカー氏著	英国出版
ユ ー リ タ リ ヤ ム	全一冊	千八百九十年	ミル氏著	英国出版

VII. 米国へ旅立ち

明治37（1904）年11月16日午後2時、富田は横浜出帆の伊予丸に乗船、渡米の途に就いた⁸。

すでに申し上げました通り、年は少しく取りましたが、しかし、気分は昔と変わりませんから、いよいよ乗り出したなら、まだ多少火事的の勇氣は出るであろうと信じて居りますが、猶吾輩の足らざるところを補って余りある講道館に於いて当時若手で屈指の前田四段を同伴致します。そこで両人の段を合わせますと、丁度十段に達しますから、変則ながら、段の上からは師範という資格が出て参ります次第であります。兎に角、兩人一生懸命にやりましたなら、どうやら一人前の事は出来ようかと思っております。

偕又（さてまた）不肖吾輩がこの度塾の舎長を辞し、講道館を去るに就きまして、又これまで吾輩と共に塾の副舎長として、猶其の以前より塾の為に献身的に尽力せられて居りました山内繁雄君も、この度米国コロンビア大学の特待生辞令を受けて、偶然2人同時に塾を去って同行することになりました為に、かれこれ大いに先生のご配慮を煩わしました結果、幸いにも同窓理学士大島英助君が代わって総ての事を担当してくれる事になりましたのは、誠に塾の為に講道館の為に、この上なき好都合のことと思います。しかもこの外に同君は弘文学院の幹事をも引き受けられた事でもありますから、随分多忙の事ではありますが、しかし同君は学識もあり、且つ久敷中学校長をもして、教育に就いて経験もあり、猶且つ加うるに以前在塾の時代は、一部先生の助けを得て学問した人でもありますから、矢張り、先生に酬ゆると云う精神から従事することでもありますから、自然塾生も能く服従し、塾中先立つ人々は、これ迄の如く、多少助けを為すと云う美風を生じて、諸事面目を改むることであろうと信じます。

吾輩はこれまで長く親しんだ塾や講道館を去るに臨んで、この適當なる後任者を得たのは実に何よりも喜ばしきことに思いまして、ここに諸君にご披露致します次第であります。平素筆不精なる吾輩は、今後境遇上、又一層諸君に音信の礼を欠くことあらんことを予めここに謝する次第で御座います。しかしながら、斯かる時に利用するのがこの同窓会雑誌の特色と存じますから、之には其の都度必ず投書致しますことを同時に盟います。

又吾輩は先月4日に立出するつもりでありましたから、その旨を告別方々ご通知申し上げました諸君も御座いますが、実は余り急のことで自分も同行者も少々準備が出来かねまして、遂



図－1 富田常次郎近影。出発前に撮影されたものであろう。（「嘉納塾同窓会雑誌第24号」，嘉納塾発行，1904）

に本月16日に延期致しました次第で御座います。その際は諸君より祝辞等を頂戴しまして、感謝の至りに堪えません。略儀ながら、ここに謹んで御礼申し上げます。

以上、出発に臨んで思うままのことを述べまして、以って告別の辞と致します。最後に謹んで、我が同窓会員諸君のご健康を祈ります。



図-2 富田常次郎米国行壮行会。前から2段目の列中央嘉納治五郎（はかま姿）。写真向かってその左富田。（「嘉納塾同窓会雑誌第24号」、嘉納塾発行、1904）

明治37年11月1日富田常次郎

同窓諸君

嘉納塾同窓会雑誌は、この間の消息を「記事」として次のように伝えた。

16日。富田、山内両氏本日午後2時横浜出帆の伊予丸にて渡米の途に上らる。塾生遠征の客を送って横浜に至る⁹

（略）舎長富田常次郎氏は柔道を米国に伝えんと、四段前田栄世氏を伴い去月16日、横浜出帆の伊予丸にて遠く米国紐育に赴かれ、同時に副舎長たりし山内繁雄氏は、紐育コロンビア大学に植物学研究の為同行せられ申し候。舎長の後任としては塾の先輩たる大島英助氏^{註5}就任せられる¹⁰

その山内が現地より次のような第一便¹¹を寄せた。

御一同益々御多祥の御事と存じ、大慶の至りに御座候。富田前舎長を主とせる一行は去る12月2日、シアトル市に上着。一泊致し、3日、大北鉄道に乗じて6日午後セントポールに着き下車。散策をも試みる。7時半同夜再び乗車、直行シカゴに至り、直ぐにバッファローに着し、夜12時carを換え進行。8日の午後2時半、当地に安着致し候（略）。山内繁雄 中幼年舎生諸君 明治38年1月

一行極めて健やか。3000里に余る長き旅、その間随分と面白き出来事も御座候。今思い出せば失笑を禁じかねる事も多々。段々にご覧に入れ可申候。種々申し上げたき事、山ほど有之候も、段々と通信する事致すべきと相考え居り候。驚きたる事もなきにあらねど、‘来て見れば聞くより低し富士の山’の俳句説き得て、遺憾なき処も甚だ多。帝國よりの通信を受け取るを、この上もなく欣ばしく感じ申候

以下は富田の短信¹²。壮健にして前田、大野等キューバの四天王と愉しんでいる様子だ。

濱田、佐渡両君の許に達したる在北米富田前舎長よりの来信

本年東都の秋は歓迎の秋にてご多忙ならん。小生相変わらず健全。先日好機会ありてナイヤガラの大瀑布を一覧致し候。前田、大野と南部の方へ参り候いしが、近日帰紐の事と存候。在塾生諸君に宜しく。

明治38年11月15日 米国紐育 富田

渡米第1号、山下義韶の在米期間は、明治36年9月～同39年5月であり、第2号、富田の出国は明治37年11月16日である。上述、山内の通信に拠れば、富田は12月上旬、米国へ上陸している。さすれば山下と富田は一時期、米国大陸と一緒に居たことになる。その間、交流が有ったか無かったか。それは今ここでは分からない。しかし、富田は時の米国大統領までが山下の門下生となって修行していたという山下の栄光を知っていた。

では富田の栄光は何か。講道館門下生第1号、即ち柔道史の原点に立つ男ということであろう。ここに先輩富田のプライドが無かったと言ったら嘘であろう。それ故にも、富田の内心には山下に高みに行かれた、先を越されたという思いがあったとみるのは穿ち過ぎだろうか。

その富田が同じ米国に於いて柔道の普及活動に邁進するのだが、その中に或る痛恨の出来事が記録されている。それは富田の敗北である。

柔道普及の第一歩目は、現地の格闘家に勝利することである。これが格闘技の性格上、特に国際社会へ進出する上では避けられない洗礼、乃至宿命である。しかし、ここに敗北の可能性が全く無いとは誰にも言えない。その可能性が顕在化するかしらないか、それは誰に分かるものでもなく、それを司るのは運のみというべきなのだろうか。

富田の場合、その可能性が現実化してしまったようである。

VIII. 米国に於ける活動

富田の米国に於ける活動については多少の揺れがある^{13, 14, 15, 16}が、伝える中身は共通しているところ多なので、虚報とは思われない。ここでは神山の記述¹⁷を引き、富田の米国に於ける活動を概観してみよう。

明治38（1905）年1月。ホワイトハウスでの山下柔道の評判が聞こえていることもあって、当日はウエストポイントの陸軍士官学校校長代理の大佐が2～3人の士官と共に富田たちをホテルまで迎えに来た。内田ニューヨーク総領事が案内役となって、富田を右に、前田を左に乗せた馬車が校門をくぐる。玄関には両側に学生が並び、一斉に敬礼してこの一行を迎えた。

休憩の後、先ず講堂で柔道の形を紹介することになった。投の形、古式の形、柔剛の形、体操の形。嘉納治五郎が起倒流、及び天神真楊流から学び、改良した柔道の形を約100本。富田が投げ、前田が受ける形式でデモンストレーションが続けられた（略）。

－柔道の形などと言って、あれは軽業師の真似をしたのだ。本気で挑んで行ったならば、あんなに上手く投げられるものじゃない－

取受が予定調和的に静かに動く形の演技を見た学生の表情には、そんな嫌疑の色が浮かび、何やらひそひそと囁き合う者もいた。

この会場の空気が富田と前田に伝わらない訳が無い。柔道衣を着て技を見せればこっちのもの、観衆も沸くだろうと思っていただけに、2人は一層緊張の度合いを強めてしまった。そうすると、自慢の柔道の腕も鈍ってくる。相手が学生だし、初めて柔道を目にするのだから、怪我をさせてはいけなだろう。思い切り投げつけて気絶させてもいけない。かといって手を抜いて、こんなものか、と思われても柔道の名折れになる。様々な思いが前田の頭を駆け巡り、とても柔道に専心することが出来ない状態のまま乱取に入ってしまった。

最初に出て来たのはレスリングの学生チャンピオンだった。前田から見たら小山のような立派な体格をしている。しかも相手も相当緊張しているらしく、小柄な前田に向かって遮二無二突進して来た。前田は咄嗟に相手の柔道衣の両袖を取って腰を深く入れ、それを思い切り弾いた。その絶妙なタイミングに大きな身体が見事にひっくり返った。それでもレスラーは直ぐに起き上がってくる。今度は右手を相手の腋の下に差し入れて、セオリー通りの腰投だ。それでも起き上がってくる処を今度は足払いで倒す(略)。寝技で抑え込もうとした処で相手の反撃に遭う。身体を反転させられ、逆に上から抑え込まれてしまった。柔道ならば、たとえ相手に上からのしかかれても、四肢を抑え込まれなければそこから反撃出来る。前田が相手の下から両襟をとって絞め落とそうとした時、観衆がどっと沸いた。前田は喉を絞めるのが気に入らないのかな、と一瞬弱気を出して、直ぐさま立ち上がり、投技に移った。技が見事に決まって相手が起き上がろうとする処を、今度は腕挫十字固。相手はたまらず、ギヴァップ、と声を上げた。

ところが後から聞くと、相手は前田が下になった時、背がマットに着いたから、既に勝負あったと思ったと言う。観衆が沸いたのも、レスリングのルールで前田の負けと判断したからであった。勝負はギヴァップで決まったとは言うものの、観衆は納得しない。居並ぶ相手が陸軍士官学校のエリート学生だったから良かったが、もし街の道場



図-3 渡米した頃の富田常次郎(中央)と前田光世(左) (『柔道百年の歴史』講談社, 1970)



図-4 米国の新聞に出た富田。護身術は女性に好評だった (『柔道百年の歴史』講談社, 1970)。

だったなら暴動になりかねない雰囲気だ。

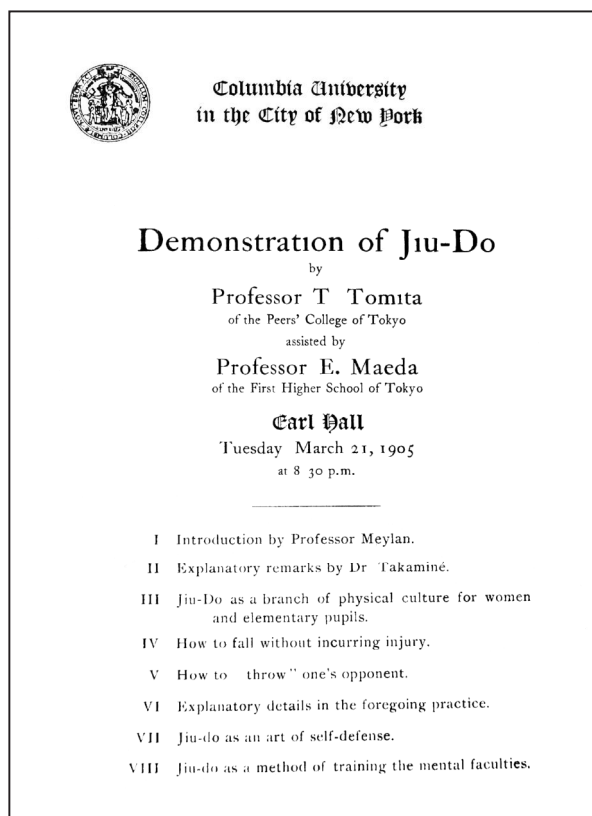
この雰囲気に吞まれて続いてマットに登場して来た富田が、一層緊張してしまう。講道館三羽鳥と言われた後輩の前田が苦戦した。柔道の素晴らしさをまだ学生達は納得していない。自分が何とかしなければ…。これで肩に力が入ってしまった。更に間の悪いことに、アメリカ側は前田の相手よりも手強そうなレスラーを富田にぶつけて来た。無理も無い。旅の間中、前田は常に富田を立てて行動して来た。日本人からすれば富田が先輩なのだから当たり前だが、実力の国アメリカから見ると、それは富田の方が前田よりも強いからだという理解になる。しかも柔道は、‘小よく大を制す’、‘婦人でも大男を投げ飛ばす’不思議な技だという先入観がある。年老いているとは言え、富田こそ神髓を極めた者に違いない、そう考えて陸軍士官学校で最強の男が挑戦者に選ばれた。

処が実際、富田は既に第一線の人ではない。講道館に在っては文治派と呼ばれ、嘉納の経営を助ける役目にあつた。年齢も40歳代に入り、最盛期は過ぎている。更にここまでの成り行きから、その両肩にはズッシリと日本と講道館柔道を背負ってしまった処に最大の弱点があつた。試合が渡米直後だったこともあって、ルーズヴェルトの前で戦った山下義韶のように、アメリカ人との戦い方やその体力、又レスリングの特色等を観察出来ていない。様々な理由が重なって、富田は力みをほぐせずにマットに上がってしまった。勝負が始まる。よもやここで相手の突進から逃げる訳には行かない。一瞬の躊躇が富田の動きを鈍らせた。組み合った瞬間に相手の太い腕がガッチリと富田の上半身を捕まえ、そのままギリギリと締め上げた。相撲のさば折の要領で富田は一瞬にして大男の餌食になり、マットに倒れ込んだ。

大男と相対する時は、先ず動いて相手の勢いを利用し、投げてから関節を極める、或いは喉を絞める。それが山下の実践した‘小’のセオリーだった。富田はそのセオリーを体現する間もなく、太い腕に捕まってしまった。柔道の技を繰り出す余裕も無く、万力のような力で締め上げられた背骨は悲鳴を上げ、富田の意識は混濁して来た。最後の力を振り絞って富田がギヴアップを呟いた瞬間に、単に勝利が逃げて行っただけでなく、富田と前田の旅の目算は脆くも崩れ、当初の思惑は大きく狂ってしまった。

大喜びする学生達。一敗地にまみれ呆然とする富田。そして前田。国の恥だ、居並ぶ日本人関係者は、はき捨てた…。

以上が富田の悪夢である。この時代に派遣された人々には、富田に限らず祖国の名誉がその肩に乗っていたことだろう。その精神状態が負けられない、負けるものか、といったモチベーション



図ー5 コロンビア大学に於ける富田常次郎と前田光世の柔道の演技を紹介するパンフレット（講道館資料館）

ーションを上げることに必要であったであろうが、しかし悲愴であることには違いない。敗北した富田の心中や如何ばかりであったことだろう。察するに余りある。

引用した神山は、この後、富田を温かく擁護し、次のように記している¹⁸。

現在の常識から見れば、敵地での1敗など大したことではない。それよりも、アメリカで見聞を広めた富田は7年後帰国し、大正の初期に赤坂溜池に建坪300坪という大きな総合スポーツジムを開くに至っている。柔道はもとより、アメリカ仕込みのボクシング、重量挙げ、射撃等が出来る当時としては本格的なものだったと言う（関東大震災で消失）。海外の運動文化を伝えたかような事業を見れば、富田は見事に国際交流の役割を果たしていると言えまいか。

勝負の面から見ても、富田は滞米生活の後半になると。異種格闘技戦のセオリーを身に付けている。後年、西海岸で道場を開いていた頃、185センチメートルもあるボクサーが富田に挑戦して来たことがあった。この時、富田は見事に相手を自分のペースに引き入れている。試合開始の鐘が鳴ると、富田はマットにごろりと寝転び、ニコニコしながら相手を挑発した。ボクサーは怒る、立て、規則違反だ。富田は笑って、いや、柔道では寝ても反則ではない、と取り合わない。しかも相手が頭を狙おうとすると、富田は寝たまま背中を中心にくるくる回り、決して相手を頭の方に回り込ませない。じれた相手が富田の足を捕まえて右手で頭にパンチを繰り出して来た瞬間、えいっと気合もろとも富田の巴投が見事に決まって勝利を収めた。

1976年、日本人プロレスラーが時の米国人WBC世界ヘビー級チャンピオンに挑戦した。「アントニオ猪木対モハメッド・アリ」の異種格闘技戦である。試合中、猪木選手はその殆どを寝て勝負した。アリ選手の強烈なパンチを食らわない戦術である。富田も対ボクサー戦ではその戦術を使い、勝利した。相手を自分のペースに持ち込んでしまえば、小よく大を制し得る。富田は滞米生活を続けて行く上で、この戦略と戦術を身に付けたと言える。富田とボクサーの間で行われた異種格闘技の試合については、富田常雄も記述¹⁹している。ちなみに小説「姿三四郎」の著者富田常雄は、富田常次郎の実子である。

寝勝負に出て相手に殴らせず、相手を自分のペースに引き込んで戦い勝利する方法だが、米国に上陸した当初はそうしなかったし、出来なかった。ウエストポイントのマットで戦うには、経験が浅過ぎた。小よく大を制しかね、大の力に脆くも振り伏せられてしまった。

この日、最早富田と前田の帰路に馬車は使われず、内田総領事の案内の約束も反故にされた。山下のようにプロフェッサーと呼ばれることも無かったし、何より柔道教師としての仕事や収入にありつくことも出来なかった。仕方なく2人は野に下る。富田はサンフランシスコ、シアトルといった西海岸へ。前田は一人、ニューヨークからロンドンへ。二人が別々の行動をとった処を見ても、この時の心の痛手が伺える²⁰と言えないだろうか。

あの日、嘉納塾生一同の格調高き送辞を受け、講道館から一路米国へ公式派遣された富田だったが、かくなる痛恨の歴史が待っていようとは想像だにできなかったことであろう。柔道の海外普及の歴史的過程が、順風満帆の良い事ばかりではなかった一つの証左と言えよう。

しかし、先達のかような艱難の時を経ずして、新しきものごとの進出、移植は成就しない。国境を越えた地に於ける新文化の進出、乃至受容には、困難が必須であることを伝えている。困難を乗り越えた時、新文化は新しき人々に受容され、普及モードへ入って行くのである。富田の体

験がその事実を物語っている。

新天地に移植された柔道が、その後その地に於いて如何なる普及過程を経て行くのか。ここはまた新しい調査、観察を要する。移植されたものが必ずしも発祥国の思惑通りに普及発展して行くとは限らない例を、我々はその後の柔道史で見せ付けられて来ているからである（例；IJF管轄の柔道）。

格闘技の普及に於ける困難とは、端的に言って名誉を懸けた勝負に勝つことである。明治のこの時期を境にして、山下義韶、富田常次郎の後を追うが如く、講道館の有段者が陸続と命を的に海外へ雄飛して行く。

IX. 結語

1. 講道館の海外派遣第2号は富田常次郎であり、前田栄世（光世）が随伴した。
2. 富田はレスリングを学んだ学生との手合わせで難儀したが、のちには勝利の戦略を習得し、成功した。
3. 柔道の米国に於ける指導について、或る程度迄は米国民の風俗習慣に合致するようにすることが、その国の流儀にかなうという見識は、弘文館で英語を学び、英語教師にもなった富田の国際理解の水準の高さを物語っているものと言えよう。
4. 柔道が国際的普及をしつつある時期に臨んで、世界の舞台を前に引っ込んでいることは大変残念である故、種々の事情を斥け、成敗は一に天に任せて海外進出を断然決心し、背水の陣で臨むとした富田の態度に國士の気概が看て取れよう。國士の育成は、嘉納が柔道を以って目論んだ人材育成のゴールである。

引用文献及び注

- 1) 大島英助, 嘉納塾同窓会雑誌第24号, 嘉納塾発行, p.1-6, 明治37 (1904)
- 2) 嘉納先生伝記編纂会, 嘉納治五郎, 講道館, p.139-140, 1964
- 3) 付録造士会塾舎教育要領 (其一) 嘉納塾教育要領 組織, 国士第6巻第52号 (復刻), 講道館, p.1, 明治36 (1903)
- 4) 大島, 前掲書第24号, p.1-2
- 5) 嘉納治五郎, 柔道概説, 嘉納治五郎大系第3巻, p.116, 1987
- 6) 同上書, p.3-6
- 7) 関野新吾, 講道館柔道側面史, 講道館葦山分場百周年記念式典実行委員会, p.87-91, 1987
- 8) 大島, 前掲書第25号, p.10-11, 明治38 (1905)
- 9) 同上書, p.11
- 10) 同上書, p.21
- 11) 同上書, p.4
- 12) 大島, 前掲書第26号, p.58, 明治39 (1906)
- 13) 工藤雷介, 秘録日本柔道, 東京スポーツ新聞社, p.44-46, 1972
- 14) 桜井康雄, プロレス対柔道, 東京スポーツ新聞社, p.216-234, 1974
- 15) 鍋田吉郎, コンデ・コマ第1巻, 小学館, 全, 1997
- 16) The United States Judo Federation, Judo in the U.S.:A Century of Dedication, North

Atlantic Books, p.27, 2005

17) 神山典士, ライオンの夢－コンデ・コマ＝前田光世伝－, 小学館, p.86-93, 1997

18) 神山, 前掲書, p.91-92

19) 富田常雄, 姿三四郎の手帳 (柔道創生記), 春歩堂, p.144-152, 昭和25 (1950)

20) 神山, 前掲書, p.93

註1) 文は人なり。現代に生きる故事ことわざ辞典, *The style is the man himself*. と英語にもある (現代に生きる故事ことわざ辞典, 旺文社, 1993)。又ラテン語 *Stylus virum arguit*. 容姿 (文体) は人を示す。又は *Oualis vir, talis oratio*. この人にしてこの言葉あり、に由来している (日英比較ことわざ事典, 創元社, 1993)。

註2) 広瀬武夫のこと。「1. 轟く砲音飛び来る弾丸 荒波洗うデッキの上に 闇を貫く 中佐の叫び 杉野は何処杉野は居ずや 2. 船内隈なく 尋ぬる三度 呼べど 答えず 探せど 見えず 船は次第に 波間に沈み 敵弾いよいよ 辺りに 繁し 3. 今はと ボートに うつれる 中佐 飛び来る弾丸に 忽ち 失せて 旅順港外 恨みぞ 深き 軍神 広瀬とその名 残れど」大正元年『尋常小学唱歌 (四)』これは日露戦争で戦死した海軍軍人広瀬武夫中佐を讃えた唱歌 (野ばら社, 2009)

註3) 学問、修業に関する諺。「七尺下がって…」とも言う。自分が師と仰ぐ人と同行するときは、三尺 (約1メートル) 下がって尊敬するほどでなければいけないという意味 (ことわざ辞典, 日東書院, 1993)。

註4) 江川太郎左衛門。伊豆韮山に住した江戸幕府の世襲代官の通称。(36代)江戸後期の砲術家・民政家。名は英竜 (ひでたつ)、号は担庵。高島秋帆に学び、西洋砲術を教授。また品川台場建設にあたり、反射炉を設け、大砲を鑄造。1801-1855

註5) 講道館維持員。評議員。慶應2年山形県南置賜郡黒川町9番地生まれ。明治19年11月29日21歳講道館入門。その後帝大理科を卒業して志を教育に向け、弘文学院の教務幹事として教育の實際にあたり、後長く福井中学校長として名声あり。個性の鋭いユニークな存在として中等教育界に重きをなしたのもこの時代である。後昭和8年5月より講道館応用課長として迎えられ、爾来4年間、応用課長、維持員、評議員として、又東京有段者会副会長として柔道の為、講道館の為、社会強化の為に努力せられた。以上は雑誌「柔道」昭和12年8月号, p.34を参照した。

註6) 既述告別の辞を見よ。